

# ああ、結婚生活

2008(平成20)年9月19日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本・製作＝アイラ・サックス／脚本＝オーレン・ムーヴァーマン／出演＝クリス・クーパー／ピアース・ブロスナン／パトリシア・クラークソン／レイチェル・マクアダムス  
(プレジディオ配給／2007年アメリカ映画／90分)

## 第2章

### 新旧半々のラインナップ

……タイトルからのイメージは、ほんのりとした癒し系？ しかし内実は？ この映画は、「人の不幸の上に幸せが築けるはずがない。築いても、心の重荷になるだけだ」をテーマとした、ブラックユーモア。夫と妻、夫の愛人、夫の親友。4人の登場人物たちはみんな古き良き時代のアメリカの道德観を信じる善人なのに、映画後半、殺人コメディとなるのは一体なぜ……？ そんな、日本にはないアメリカ的道德観の面白さをタップリと……。

## このタイトルで思い出す映画は？

私は中学・高校時代によく映画を観たから、1960年代の名作はよく覚えている。したがって、『ああ、結婚生活』というこの映画のタイトルを見てすぐに思い出したのが、ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニが共演した『あゝ結婚』(64年)。念のため私の愛読書である『映画大全集 増補改訂版』という分厚い本で調べてみると、最初の頁の冒頭に載っているのが、『あゝ結婚』。これは、あいうえお順のクラス分けにすると、相崎君や相原君が1番になるようなもの……。

『あゝ結婚』は、娼婦として出会った女が20年間たくましく生き続け、遂に男の臨終に乗じて結婚式をとりつけたうえ、3人の子供までも育てていたという、たくましいソフィア・ローレンが魅力のコメディだった。これに対して、原題『MARRIED LIFE』、邦題『ああ、結婚生活』は、同じように「死」をテーマとしている(?)ものの、戦中から戦争直後にかけてのイタリアを舞台とした『あゝ結婚』とは異なり、1949年のアメリカが舞台。なぜ、死をテーマとしたストーリーになったのかは観てのお楽しみだが、それ以上に面白いのが、1949年当時のアメリカの価値観や道德観。

この映画は、是非そんな点に注目しながら鑑賞したい。

### 思わずハタとひざを打ったが……

今や日本でもフランスでもそしてアメリカでも、離婚率はうなぎ上り。そんな中、私が結婚式に出席するたびに雑談（放談）として話しているのが、神父様が「病める時も、貧しき時も……愛することを誓うか？」と問う「あの質問」に対して、新郎新婦が例外なく「誓います」と答えていることのインチキ性。誰が考えても、その答えは「少なくとも現時点では一生愛するつもりです」というのが正直なところ。そんな誓いをしながら、いとも簡単に離婚するのはまさに神との契約違反だと認識すべきだし、そのように重く認識したうえで誓うのが本来の筋。したがって、誰が見ても幸せそうな夫婦生活を営んでいるハリー・アレン（クリス・クーパー）から、妻のパット（パトリシア・クラークソン）と離婚したいと打ち明けられた親友のリチャード・ラングレー（ピアース・ブロスナン）は大ショック。しかもそれが、今日の前に登場した若く美しい愛人ケイ・ネスビット（レイチェル・マクアダムス）のせいだということから、さらにビックリ。気を取り直したりチャードのハリーに対するアドバイスは、「それなら離婚すれば……」という当たり前のものだったが、それに対するハリーの「神父様の前で神様に誓ったからそれは破れない」という答えに私はビックリ。なるほど、1949年当時のアメリカには、まだ神との契約だから守らなければならないという価値観が強く生き残っているわけだ。そんなハリーの答えに、私は「いったん神と契約した以上、そうでなくっちゃ」と、思わずハタとひざを打ったが……。

### 『あぁ、結婚生活』 vs. 『エデンより彼方に』

1950年代の「古き良きアメリカ」を舞台としたトッド・ヘインズ監督、ジュリアン・ムーア主演の名作が『エデンより彼方に』（02年）だった。理想的な良妻賢母、幸せいっぱいのお家庭のはずだったが、その内実は……？

『あぁ、結婚生活』のプレスシートの冒頭には、「『エデンより彼方に』の前篇とも言える作品」というニューヨークタイムズの批評が載っている。また高崎俊夫氏の「黄金期ハリウッド・メロドラマの彼方に」にも、『エデンより彼方に』と対比する視点が提示されている。しかし、私にはこの両作品は同時代のアメリカを舞台としたという共通点しか見出せない。私に言わせれば、『エデンより彼方に』は、第1にホモ

セクシャル（同性愛）、第2に黒人差別という大きな社会問題を提起し、深く考えさせる名作だった（『シネマルーム3』165頁参照）。それに対して『ああ、結婚生活』は、「人の不幸の上に幸せが築けるはずがない。築いても、心の重荷になるだけだ」という、あの時代の道徳観をモチーフとしながら、欲深い人間たちが織りなすブラックユーモア＝殺人コメディを、皮肉と微笑みに包んで面白く描いたもの。したがって、両者は全然質の違う作品なのだ。また両者を比較して私が決定的に不満なのは、『エデンより彼方に』におけるジュリアン・ムーアの圧倒的な美しさと存在感に対し、『ああ、結婚生活』における2人の女優、すなわちハリーの妻パットを演ずるパトリシア・クラークソンとハリーの愛人ケイ・ネスビットを演ずるレイチェル・マクアダムスにそれほどの魅力が感じられないこと。勝手なことを言って申し訳ないが、これが私の正直な『ああ、結婚生活』vs.『エデンより彼方に』。

## キーマンはリチャード

この映画の主人公は、会社の重役で郊外の高級住宅に住み、別荘を持ち、相思相愛の美しい妻パットに恵まれた幸せな男ハリー。他方、この映画のキーマンになるのは、ハリーの親友でプレイボーイのリチャード。男の友情にはいろいろなパターンがあるが、ハリーが自分の愛人ケイをリチャードに紹介し、妻と離婚したいという思いを打ち明けるほどだから、その友情の深さはかなりのもの。

他方、リチャードはパットの信頼も厚く、ハリーの別荘でパットが若い男と浮気している現場を発見した時は、逆にパットから夫ハリーと離婚したいとの思いを打ち明けられるほど。弁護士の世界ではこれを「双方代理」と言って、両者の代理人となることは禁じられているが、さてリチャードは……？

さらに問題がややこしくなったのは、ケイを一目見た時からリチャードがケイにホレってしまったこと。ケイは両親を亡くしたうえ、夫まで亡くなったことによって、喪失感に苦しんでいたから、父親ほど年の離れたハリーは経済的援助＋愛情という頼りになるパトロン。しかし、客観的にはどう見ても愛人関係だから、世間に公表できない悩みが。その点リチャードは独身だし、正直に言えばハリーよりカッコいいから、この際リチャードに乗り換えた方が……？ ケイがそう考えたかどうかは知らないが、こんな風にハリー、パット、ケイの三者の本心に深く関わったキーマンのリチャードは、この映画の中でどんな行動を……？



© 2007 KIMMEL DISTRIBUTION, LLC All Rights Reserved

## 🎬 「それならいっそ……」という価値観の是非は？

この映画の前半は、心の底から妻パットを愛しているのに同時にケイを愛してしまったため、ハムレット的苦悩を抱えたハリーがどのように生きるのがストーリーのポイント。「なら、離婚を……」というリチャードの提案は当然だが、「いや、俺の妻は俺なしでは生きていけない！」「離婚などすると、ひょっとして自殺まで！」と真剣に考えているところが面白い。この映画のラストに提示される、「夫婦は長い年月ベッドを共にする。しかし、お互いの本心を本当にわかっているのだろうか？」という問いに「YES」と答えられる男は一体ダレ……？ だって、そんなくならない苦悩(?)を続けているハリーを尻目に、パットはちゃっかりと若い男と浮気に励んでいたのだから。この映画が作品として面白いのは、「それならいっそ……」とハリーがパットの殺害を企てるどころ。パットへの愛の深さから生まれたこの選択は決して突拍子もないことではなく、考えに考えた挙げ句、最も合理的かつ理想的な解決策かもしれないが、さてその価値観の是非は……？

## 映画後半は殺人コメディに

リチャードがハリーの殺人実行計画にどのようなスタンスをとったのかは、あなた自身の目で確認してもらいたい。会社重役として社会的に大成功を収めているハリーにとって、殺人計画を練るのはもちろんこれがはじめてのこと。ハリーの計画の主眼は、パットが毎日飲んでいる薬にある毒物を混入させること。この映画の時代から50年以上経った今日では、中国製冷凍ぎょうざ事件や汚染米事件をはじめとして、食品への異物混入は日常茶飯事となっている。しかし、1949年の古き良きアメリカで、しかも「人の不幸の上に幸せが築けるはずがない。築いても、心の重荷になるだけだ」という道徳観に縛られているハリーにとっては、それは大変な仕事。毒物の購入は？ その仕掛けは？ アリバイづくりは？ …… etc. さあ、ハリーはどんな風に愛妻パットの殺人計画を実行し、成功に導くのだろうか……？

## 結局、元のさやへ……？

90分の上映時間全編を通じて私が思うのは、1949年当時のアメリカの豊かさ。私が生まれた年である1949年の日本はまだ戦争直後で貧しかったが、この映画を観れば1949年のアメリカがいかに豊かな国であるかがよくわかる。大きなお家と大きな車、飼い犬、別荘そして冷蔵庫、テレビ、高級ウイスキーなど夢のようだ。

また、私の小中学生時代は外で食事をするなど夢のまた夢だったが、この映画では冒頭ハリーがリチャードに愛人ケイを紹介するレストランをはじめ、豪華なレストランがたくさん登場する。また、ハリーの自宅で開かれる食事会も実に豪華。ちなみに、車が不可欠なアメリカ社会だから、ハリーもリチャードもどこへ行くにも自分で車を運転していたが、この映画で見ると限りどうも飲酒運転は平気のよう。しかし、こりゃちょっと問題では……？

この映画のラストシーンは、ハリーの家におけるホームパーティー。そこには近所のご夫婦たちの他、仲睦まじそうなリチャードとケイ夫婦（？）も出席し、実に楽しそうな雰囲気。そしてパーティー終了後、お客さんたちを見送るのがハリーとパット。あれ、あれ、ハリーによるパット殺しの計画はどうなったの？ それはあなた自身の目で。この映画を見終わった後私は、日本がこんな国と戦争しても勝てるはずがない、というヘンな実感をあらためて……。

2008(平成20)年9月20日記